

支部大会研究発表題目

二〇〇三年秋季大会「10月18日、  
於・大阪樟蔭女子大学」

・石川淳「白描」論 神戸とユダヤを手がかりに」西垣尚子（奈良女子大学大学院）

・安成貞雄と大正期ナシヨナリズム」村田裕和（立命館大学大学院）

・伊東静雄「水中花」論 その美意識と至福の感情」湯浅かをり（奈良大学附属高等学校）

・『草枕』冒頭はどこから来たのか」野口裕子（新居浜工業高等学校）

二〇〇四年春季大会「6月12日、  
於・神戸大学」

・遠藤周作「白い人」論 改稿から読み取れるジャックの自殺の真相」田中 葵（関西大学大学院生）

・森鷗外「半日」論 高山家に見える日露戦争後の「個の主張」の問題」出光公治（関西学院大学大学院文学研究科研究員）

・山口曠江分利満氏の優雅な生活」論」金岡直子（神戸大学大学院生）

・見えないものの文学誌 心霊とウィルスに関するノート・鈴木光司「リング」らせん「ループ」を読む」奈良崎英穂（プール学院大学）

支部大会印象記

二〇〇三年秋季大会印象記

二〇〇三年度の秋季大会は、一月八日、大阪樟蔭女子大学で開催された。前半の二つの発表についての感想を記す。西垣尚子氏の「石川淳「白描」論 神戸とユダヤを手がかりに」は、神戸という舞台設定と、主要登場人物がユダヤの血をひいているという設定の意味をさぐるもの。同時代のコンテクストに還元しながらの読解は、注釈的読みの提示と受け取れた。ユダヤ人の血統という設定については、時流に乗った通説を利用しながら、日本的なもの破綻ということを隠すという役割を果たしているという分析が示された。大橋毅彦氏の質問に示されたように、そうした設定が、当時のユダヤ人政策の中で、どのような意味を持ち、また、人物形象に何を付加するののかということさらさらに踏み込んで、検討する必要があるだろう。最初に発表者自身の作品の価値づけを示す方がよかったのかも知れない。微細な読みという分析の方向を、表

現全体の価値づけという総合の方向に、いかに交差させるかというのは、私たちが共有すべき問題だと感じた。質疑応答の中で問題が深められ、口頭発表することの意義を実感することができた。

村田裕和氏の「安成貞雄と大正期ナシヨナリズム」は、安成の批評活動を掘り起こすとともに、その遊撃的批評スタイルが、膨脹する日本国家に歩調を合わせた岩野泡鳴らのナシヨナリズムの批判に有効性を発揮したこと分析が骨子であった。安成の批判対象である大正期ナシヨナリズムの把握が、「武士道論、処世訓、国民性論など多角的な視野から思想史のコンテクストを踏まえて示され、大いに啓蒙された。大正デモクラシーの影になりがちな部分に光が当てられたという印象がある。論敵である大正期ナシヨナリズムの分析に比べると、安成のとらえ方はその個人性に重点が置かれているように思われた。その分、批判対象に対して、安成の優位があらかじめ担保されているように感じられた。安成の遊撃的な批評スタイルや手法の生成の過程を大杉や堺と比較しながらもう少し具体的に指摘してほしかったし、そうしたスタイルは思想史や批評史のコンテクストのなかでどのような位置づけができるかということも聞きたかった。村田氏は、安成の科学的精神と編集者・記者生活は、社会主義的実行を持たない以上、根源的な矛盾を止揚できない」というが、それは余りに短絡的ではないか。「実行」が思想より優位にあるという発想は、ほんとうは根拠がないのではないか、と筆者は考えている。

分析と総合の二つの方向をどのようにに交差させるかがとても肝要だ。ハイテク機器のような、細部へのこだわりと精緻さの方向はよく見えるが、全体をすくい取る、目の粗い強靱な網のような総合の方向は、なかなか見えにくいというのが現状だ。二つの発表を聞いてそんなことを考えた。（木股知史）

文学研究に於ける「論証」とは何か、それは何を以て「証」となし得るのか。今回、特に後半の二題は、研究の始原のその根本的命題を改めて考えさせられる発題であった。

湯浅かをり氏の「伊藤静雄「水中花」論 その美意識と至福の感情」は、「夏花」の絶唱「水中花」に伊藤の内的耽美の極みの卓越なる形象を言う論点であるが、氏の論証は三島由紀夫とアルベール・ベガンの言説を論拠とするものである。

研ぎ澄まされた作家の感性は、確かに作品の中枢を射抜いて脱帽させられることがあるが、三島の伊藤詩論を以て伊藤の詩の高みを言うのであれば、研究者は逆に、作家の言葉とは違う平易な言葉を多弁して説明的である必要がある。氏の方法は三島の言説のあと追いと絶対的帰依が、ために論者自身の論点を曇らせてしまった感がある。

肝心の詩詞「堪へがたければわれ空に投げうつ水中花」、あるいは「あゝわれら自ら孤寂なる発光体なり」を言う解釈・説明も少な過ぎるであろう。しかし、論者の伊藤静雄詩への「想い入れ」の伝わった熱き発表であった。（伊藤詩を愛する）その心余りて、（しかし説明の）詞たらずで

あつたと言える。

恐らく将来に、その全貌を現すことになるであろう可能態としてある形而上学的な詩で、伊藤詩はあるとすれば、氏の将来の伊藤静雄詩論が期待される。

最後の野口裕子氏の『草枕』冒頭はどこから来たのか 新資料の検討から 『は、五常訓』(宮城県松島)にある描写が『草枕』冒頭と似ていることから、漱石の『草枕』執筆以前の松島瑞巖寺詣でを根拠に、典拠の発見を言うものである。

しかしフロアからの指摘にもあつたが、漱石の絶大な「漢文の素養」を慮れば、そう安直には言えないであろうし、漢文脈の文体に多くある言い方で、そもそも『草枕』の冒頭もあるであろう。(説明の)詞はたくみにして、(しかし作品の内実に)そのさま身におはずである。

しかし氏が指摘されたように、人口に膾炙している割には『草枕』の冒頭への言及は意外と少ない。氏の言われるように、『草枕』の冒頭は、いま一度、本気で考えるの必要を促した問題提起であつた。

それにしても、漱石の発表は「怖い」ことだと思ふ。膨大に蓄積された「研究史」との格闘は前提に、論者の文学観、ひいては人生観がもろに問われ兼ねないことにもなる。既に円地文字の手練な研究者である氏にしては、『草枕』冒頭というピツクな対象ゆえへの脹らんだ聴衆の期待が、些か肩透かしを受けた感があつた。

(鳥井正晴)

## 二〇〇四年春季大会印象記

本年度の春季大会は、六月十二日に神戸大学で開催された。研究発表は四本であり、明治から平成まで多種多様で興味深かつた。私は前半の二作を取り上げて印象記を記すこととする。

まず、最初の田中葵氏の「遠藤周作『白い人』論 改稿から読み取れるジャツクの自殺の真相」である。『白い人』は「近代文学」に発表され、芥川賞受賞後に『文藝春秋』に再掲載された際に大幅な改稿がなされた。本発表は、これまでの先行研究ではほとんどとりあげられなかつた改稿の問題をとりあげて、ジャツクの自殺の真相を探るものである。田中氏の作成した異同表を丁寧にみていくと、ジャツクとマリー・テレーズは、ダンスパーティーの夜に肉欲の罪を犯したことがわかる。ジャツクが拷問を受けた時は、既にマリー・テレーズは処女ではなかつた。田中氏はマリー・テレーズを陵辱から守るために、カトリックの大罪である自殺をしたという多くの先行研究に疑問を呈する。田中氏は、私がマリー・テレーズに手を出すとジャツクが姦淫の罪を犯したことがばれるのでそれを恐れたために自殺をしたというのが真相だという。研究の基礎的作業である本文異同を検討することによって、作品のクライマックスともとれる最後の部分に、先行研究を覆す新しい読みを提示したことは非常に意義深かつた。ただ、田中氏は、『白い人』は作者の未熟さが目立つというがそれだけか。訂正後

の作品世界の文学的価値、タイトル『白い人』の意味や神の問題などをどう扱うのか。今後はさらに発展させて、単に改稿の指摘と自殺の意味だけにとどまらず、主題をも視野に入れた幅広い考察を望みたい。

次に出光公治氏の「森鷗外『半日』論 高山家に見える日露戦争後の『個の主張』の問題」である。鷗外が、『半日』で、一家庭を描きながらも、ただの現実暴露にとどまらず、時代批評をしていることを先行研究から指摘する。多くの先行研究をよく精読し纏められたことに敬意を表したい。また、作品から「孝」の価値観を否定する奥さんの個の主張を浮き彫りにし、それは、時代特有の産物だとする。出光氏は、高山の言う「時代特有の産物」に注目し、それが日露戦争後の「混沌」とした時代からくるものであるとする。日露戦争後という時代はモダニズムへと向かう時代でもあり大きく価値観が変化していく重要な時期である。女性が女性の権利を確立していく時期でもある。着眼点は面白いと思うのだが、残念ながら説明に説得力のない点が目についた。会場からも「日露戦争後の混沌 だけで鷗外を説明するのはいささか乱暴」との指摘もあつたが、もう少し実証的な論拠が欲しかった。そもそも日露戦争後の混沌とは何なのか。一九一〇年代は日本近代文学にとって非常に重要な時代である。更に研究を進めていき、今後も鷗外の時代批評精神を深く掘り下げていけることを期待したい。

況であつた。

(増田周子)

金岡直子氏「山口瞳『江分満氏の優雅な生活』論」と奈良崎英穂氏の「見えないものの文学誌―心霊とウイルスに関するノート・鈴木光司「リング」『らせん』『ループ』を読む」についての印象を記す。いずれの発表も、筆者の予想していた内容よりも、深く、新鮮で刺激的なものであつた。

金岡氏の発表は、『江分満氏の優雅な生活』とその習作と言つべき「履歴」との異同を調査し、山口瞳という作家の位置付けを捉えなおそうとする試みである。山口のこの小説を、表層のサラリーマン的な健全性や平凡性といった読みから解き放ち、第三の新人達の小説との類縁性つまり深層にある戦争との関連性を読み解こうとしたものである。氏の報告にある、「習作」「履歴」の表現で後に削除された箇所は実に興味深い。課題をあえて言えば、削除の理由は、『江分満氏の優雅な生活』が連載された「婦人画報」というメディアの問題なのか、あるいは六十年代という時代の問題なのか、山口の小説創作における自覚的方法の問題なのか。難しい問題だが、金岡氏の見解を論証するためには重要ではないかと、筆者は考える。

奈良崎氏の報告は、心霊と都市伝説、都市伝説とウイルス小説との流行の関連性、そしてエイズの描かれ方の類型性などを、豊富な資料を駆使して考察しようとしたものである。九十年代以降のホラー小説やウイルス系パニック小説を概括した上で、『リング』『シリーズ』や瀬名秀明『パ

ラサイト・イヴ』の表現内容に、類型化したエイズ小説の欠陥を補う機能を指摘するなど、興味のつきない報告であった。時間の制約で氏の準備した資料の説明が十分になされなかったことは、氏自身はもちろんなことわれわれにとってもたいへん残念なことであった。(西尾宣明)

## 研究会紹介

主に関西で行われている研究会について、以下の項目順で紹介します。(順不同)

### 会の名称

代表者または事務局等、連絡先の名・住所・電話番号

会希望者のための入会案内  
その他注意事項等

### 芥川龍之介研究会

ホームページ URL

[http://www.geocities.jp/bookend\\_ryunosu\\_ke5569/](http://www.geocities.jp/bookend_ryunosu_ke5569/)

連絡先 e-mail アドレス  
choko\_dou@yahoo.co.jp

本会は、1998年、出身・所属大学の枠を超えて、芥川龍之介とその文学について研究すべく、関西在住の院生・研究生・大学教員を中心に発足されました。現在の例会参加者数は、10〜15名ほどです。芥川以外の近代作家や、さらに外国文学・比較文学を専門とする方も来て下さっています。年2回(大学の春休みと夏休み)、土曜日に大阪市内で「例会」

「研究発表会」を開催しています。「例会」は大阪で開催していますが、関西以外からも参加されています。そのため、発足当初から数年間は「例会」を春夏秋冬の年4回開き、3年ほど前からは回数を年2回に減らし春と秋に開催していたのですが、地方の大学教員の方も参加しやすいように、年2回開催はそのままにして開催時を「春休み(2月か3月)と夏休み(7月下旬から9月上旬)」の開催に変更しました。また、参加者の専門や研究対象の多様化をふまえ、発足主旨の「芥川龍之介とその文学について」も、3年ほど前から「芥川龍之介とその文学を中心とした日本の近現代文学について」と、あまり芥川にこだわらない方向に変更しています。なお、現在、「会費」「会場費」の類は頂いておりません。ただ、遠方からご参加いただく場合、交通費は各自でご負担下さるようお願いいたします。最後になりましたが、

当会では「入会(参加)資格」などは設けておりません。「愛好会」ではなく「研究会」である事をご理解いただければ、基本的にどなたでもご参加いただけます。例会参加希望の方は、事務局宛に e-mail で連絡下さい。追って「例会案内」メールを送信させていただきます。

これまでの「発表題目・発表者・会場等」については、当会のホームページ、「国文学」「学界教育界の動向」「文学・語学」「彙報」「いずみ通信」・「催し・研究会・同人誌などのご案内」欄を参照下さい。メールアドレスをお教え頂ければ e-mail で年二回の「例会案内」を送らせて頂き

ます。なお、当会では、経費を抑えるため郵便による例会案内は送っておりません。

### 近代部会(大阪国文談話会)

鳥井正晴 相愛大学人文学部 日本文化合同研究室 連絡先 相愛大学人文学部 日本文化合同研究室 鳥井正晴 〒559-0033 大阪市住之江区南港中四・四・一 06-6612-5900(代) 漱石の作品を、章を追って、丁寧に読んでいく、輪読会です。

### 文学論を読む会

鳥井正晴 相愛大学人文学部 日本文化合同研究室 連絡先 相愛大学人文学部 日本文化合同研究室 鳥井正晴 〒559-0033 大阪市住之江区南港中四・四・一 06-6612-5900(代) バフチンを、輪読します。テクスト「ミハイル・バフチン著作集」(新時代社)

### 三重近代文学研究会

皇學館大学文学部 半田研究室 0556-22-0201(代) 原則として七月、十二月の第二土曜日 特にありません

### 会員の業績

凡例  
著書名: 『  
論文名: 『  
掲載誌紙名: 『  
注記等: ( )

各業績に付した番号のうち、は単行本、は雑誌収録論文・項目執筆等を示す。なお、は書名・出版社・発行年月の順、は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順で記した。掲載誌紙の巻号数は省略し、原則として雑誌は発行月のみ、新聞は発行月日を記した。原則として雑誌の編者名・発行書名は等は会員の届出に記載のあるもののみ記した。著書名・論文名・掲載誌紙名の用字は、原則として会員届出の記載に拠っている。

### A行の部

足立直子

「芥川龍之介」南京の基督論  
宋金花の祈りにける宗教性  
『日本文芸研究』〇三年六月

「成瀬正一 第四次「新思潮」という文学発信の磁場において」国文学解釈と鑑賞 別冊、〇四年一月

「芥川龍之介とキリスト教」西方の人」続西方の人」を中心にして

『キリスト教文芸』〇四年三月

乾口達司

「花田清輝と 小説 の精神」『新日本文学』〇四月一月

入江春行

『与謝野晶子とその時代』新日本出版社、〇三年四月

岩見幸恵

第3章 宮部みゆきの文学「祝・殺人/長い長い殺人/クロスファイア」

『宮部みゆきの魅力』 勉誠出版、○三年四月

五木寛之を読み解く、「難民」、文学ガイド「深夜草紙（小説）／深夜草紙（エッセイ）／ちいさな物みつけた／僕のみつけたもの」五木寛之「風狂とテラシネ」 勉誠出版、○三年七月

村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」についての一考察 校異と戦略（プロット）の問題について「神戸親和女子大学親和国文」○三年十二月

太田登

「文学における個と我の問題」輔仁大学日本語日本文学 ○三年七月  
「石川啄木における個と我の問題」国際啄木学会編『漂泊海過的啄木論』○三年七月  
「都市漂泊者としての漱石と啄木」台湾大学日本語研究 ○三年十二月

「啄木評論の魅力 二重生活の意識と反指定」国文学解釈と鑑賞 ○四年一月  
「明治三十四年の短歌史的意味」山邊道 ○四年三月

岡崎昌宏

「辻邦生『旅の終り』論」『解釈』○三年八月  
「辻邦生『嵯峨野明月記』論」『阪大近代文学研究』○四年三月

岡田正子

「幸田露伴『風流伝』考 珠連は如何お辰は如何になりしや をめぐって」関西学院大学『日本文藝研究』○三年九月

奥野久美子

「東と西」「西洋の呼び声」ギリシア、ルドン、モロー」国文学 解釈と鑑賞別冊「芥川龍之介 その知的空間」○四年一月

奥村紀子

『日本少年』重見周吉の世界 創風社出版、○三年七月（○四年一月愛媛出版文化賞奨励賞受賞）

力行の部

亀井千明

「メディアの中で生成される私 志賀直哉『大津順吉』に見る自己語りの様相」『阪神近代文学研究』○四年三月  
「思想をめぐる物語としての『山形』」甲南国文 ○四年三月  
「戦略」となった自作解説—志賀直哉『創作余談』、続創作余談—続々創作余談—『近代文学試論』○三年十二月

岸本次子  
「真珠の指輪 『それから』の小道具」『武庫川国文』○三年十一月

「長襦袢に付せられた意味」『三四郎』それから』門』を中心に「かほよとり」○三年十一月

木田隆文

「武田泰淳『森と湖のまつり』の言説圏— 観光 小説を視座にして—」『国文学論叢』○四年二月  
「鶴崎鷲城」『関妃』鳥谷部春汀「横山源之助」上田博・瀧本和成編

『明治文芸館』『嵯峨野書院』○四年三月

木村瑞夫

『論叢中島敦』和泉書院、○三年九月

木村有美子

『尾崎紅葉』心の闇 私論（三）『樟蔭国文学』○四年三月

工藤哲夫

『オツベルと象』の象、又は白象 京都女子大学『女子大國文』○三年十二月

熊谷昭宏

「小島烏水 鎗ヶ嶽探険記」論要請された『その土地特有の景象』について『同志社国文学』○四年三月

倉西聡

「資料紹介 福永武彦『忘却の河』TV放送台本についてのメモ」（仮題）早稲田大学本庄高等学院国語科文集創立二十周年記念特別号 ○三年三月

小林幹也

「太宰治『彼は昔の彼ならず』論」『近畿大学日本語日本文学』○四年三月

サ行の部

澤田由紀子

「雁の童子」『さしき童子のはなし』宮沢賢治の全童話を読む』学燈社、○三年五月（初出『国文学 解釈

と教材の研究 宮沢賢治の全童話を読む』○三年二月）

「文字の精霊 日夏耿之介」「工口スとエレガンス 堀口大学」木股知史編『近代日本の象徴主義』おうふう、○四年三月

真銅正宏

共著『パリ・日本人の心象地図』藤原書店、○四年二月  
「料理学校の歴史とその周囲」『彷彿月刊』○三年四月  
「書評・竹松良明編『岡田三郎三編』EDI叢書』図書新聞』○三年四月二十六日

「汁粉」「氷水」『国文学』臨時増刊号特集『食』の文化誌』○三年七月  
「交渉と交雑の環境 京・大阪の文学と義太夫・地歌」『昭和文学研究』○三年九月  
「ジャンルの彩り 永井荷風の文学観」『国語と国文学』○三年十一月

「河内という土地」大阪芸術大学『河南文芸 文学篇』○三年十一月  
「京都・奈良・神戸」『国文学解釈と鑑賞』別冊『堀辰雄とモダニズム』○四年二月

鈴木昭一

「島崎藤村『訪西行庵記』私注」『青須我波良』○三年三月  
「東方の門」と『初代 長瀬富郎伝』『帝塚山芸術文化』○三年三月

須田千里

「永井荷風コレクションについて（上）」『館報池田文庫』○二年四月  
「佐藤春夫と中国文学（下）」文

学』○二年五月

『永井荷風コレクションについて(下)』、『館報池田文庫』○二年十月

『狂詩の終焉』、『国語国文』○三年三月

『内田百閒』、『山高帽子』の材源  
『モーパッサン』、『オルラ』、『芥川龍之介』、『函車』など  
『京都大学総合人間学部紀要』○三年三月

『尾崎紅葉コレクションについて』、『館報池田文庫』○三年四月

『尾崎紅葉集』(新日本古典文学大系明治編19) 岩波書店、○三年七月

『泉鏡花コレクションについて』、『館報池田文庫』○三年十月

『読売新聞』、『狂詩壇』、『尾崎紅葉』

『国語と国文学』○三年十一月

『新編泉鏡花集』第八巻、信州・飛騨、岩波書店、○四年一月

### 夕行の部

田口道昭

『啄木』、『時代閉塞の現状』論、『必要』をめぐって、『国際啄木学会』、『国際啄木学会台湾高雄大会記念論文集』○三年七月

『川上眉山の文学』、『観念小説』の周辺、上田博・瀧本和成編、『明治文芸館』、『嵯峨野書院』、○四年三月  
『幻想という実感』、『与謝野晶子』、『幻影の魅惑』、『吉井勇』、『神経のふるえ』、『佐藤春夫』、『木股知史編』、『近代日本の象徴主義』、『おつふう』、○四年三月

外村彰

書評『浅川均著 高崎宗司編』、『朝鮮民芸論集』、『明治の森』、○三年十一月

『詩人 井上多喜三郎書誌・補遺』

『文献探索2003』、『文献探索研究会』、○三年十二月

『外村繁と井上多喜三郎』、『淡海文化を育てる会編』、『近江歴史回廊』、『近江商人の道』、『同会』、○四年一月  
『平田禿木』、『上田博・瀧本和成編』、『明治文芸館』、『嵯峨野書院』、○四年三月

### ナ行の部

永井敦子

『谷崎潤一郎』、『秘密』論、『探偵小説との関連性』、『日本文藝研究』、○三年十二月

『谷崎潤一郎』、『或る罪の動機』論、『犯人と探偵の造型をめぐって』、『阪神近代文学研究』、○四年三月

永瀨朋枝

『民友社と』、『文学界』、『西田毅』、『和田守』、『山田博光』、『北野昭彦編』、『民友社とその時代』、『ミネルヴァ書房』、○三年十二月

中村美子

『『明暗』における』、『技巧』』、『津田とお延をめぐって』、『『解釈』』、○四年二月

生井知子

『お貞さん』、『調布市武者小路実篤記念館図録』、○三年四月  
『武者小路実篤と志茂シズ・テイ姉妹』、『同志社女子大学』、『日本語日本文学』、○三年六月

『志賀直哉の潔癖症をめぐって』、『国文学 解釈と鑑賞』、○三年八月

西村将洋

『伝統的最先端の視線 一九三〇年代モダニズム考』、『日本文学』、○三年九月

『神奈川近代文学館蔵 俳句雑誌『風流陣』総目次』、『HAIKAI DU JAPON』の軌跡』、『同志社国文学』、○三年十二月

野田直恵

『岡本かの子』、『河明り』の『目的』、『国文学論叢』、○四年二月

信時哲郎

『水仙月の四日』、『国文学 解釈と鑑賞』、○三年九月

『神戸カフェ物語』、『神戸新聞総合出版センター』、○三年十二月

『宮澤賢治』、『文語詩稿』五十篇』、『評釈5』、『神戸山手大学紀要5』、○三年十二月

### ハ行の部

半田美永

『政治小説の創始者』、『桜田百衛』、『盟友中村菊也の終焉の地に』、『解釈と鑑賞』、○四年三月

細江 光

注『痴人の愛』、『新潮文庫』、○三年六月

『谷崎全集逸文一点と谷崎関連資料四点紹介』、『甲南国文』、○四年三月  
『上山草人年譜稿(四)』、『谷崎潤一郎との交友を中心に』、『甲南女子大学文学部研究紀要』、○四年三月

### マ行の部

槇山朋子

『遊歩する人々』、『不器用な天使』から、『聖家族』へ』、『解釈と鑑賞』別冊。『堀辰雄とモダニズム』、○四年二月

三品理絵

『泉鏡花と近世絵画の意匠―文様の想像力の形成と展開―』、『比較文学』、○四年三月

水川布美子

『太宰治』、『葉枝と魔笛』の『一考察』、『日語教育』(韓国日本語教育学会)、○三年六月

『太宰治』、『古典風』の『一考察』、『皇學論叢』、○三年十月

『太宰治と風流』、『黄村先生』シリーズを中心に、『日本学報』(韓国日本学会)、○三年十一月

『太宰治』、『盲人独笑』、『試論』、『神女大國文』、○四年三月

箕野聡子

『菊池寛』、『戯曲』、『坂田藤十郎の恋』考』、『神戸海星女子学院大学 研究紀要』、○四年三月

### ヤ行の部

屋木瑞穂

『琴の音』、『国文学解釈と鑑賞』特集『樋口一葉』、『これまでの、そしてこれからの』、○三年五月

吉岡由紀彦

項目執筆、『回覧雑誌』、『夏期大学』、『小島政二郎』、『北京』、『関口安義編』、『芥川龍之介新辞典』、『翰林書房』、○三年十二月

「『羅生門』 研究史・続 三好行雄の『人間悪』『存在悪』(2)」 『SOLITUDE』○三年四月

「作者」と作家像 について  
バフチンの 作品構成上の創造者たる作者 と 生の要因である人間としての作者 の区別から」 『批評理論研究』○三年五月

「主題論(テーマ批評) のアボリア(2) ボリス・トマシエフスキの『テーマ論』批判」 『GETOVER』○三年八月

「芥川龍之介をめぐる人々 ネットワーク最前線 宇野浩二 芥川との出会いと『龍之介の天上』の位置」 関口安義編『「国文学 解釈と鑑賞」別冊 芥川龍之介 その知的空間』至文堂、○四年一月

## ワ行の部

渡邊ルリ

「野上弥生子『茶料理』論」 『東大版大学・東大版大学短期大学部教育研究紀要』○四年三月

書評「村田秀明著『中島敦「弟子」の創造』」 『日本近代文学』○三年五月

## 関西支部ホームページ

<http://www.5c.biglobe.ne.jp/~kindai>

## 関西支部メールアドレス

[kansaishibu@mri.biglobe.ne.jp](mailto:kansaishibu@mri.biglobe.ne.jp)